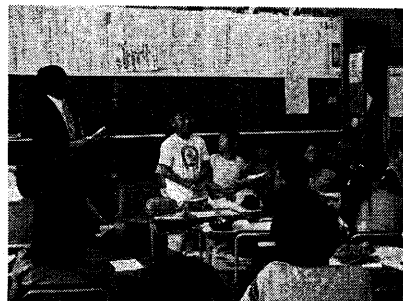


国 語

国語の力を意識して自らの学びに生かす子供の育成

～ことばを大切にして、自らの『読む力』を発揮し互いに高め合う授業の追究～

子供たちが、新たなことばの発見をすることを大切にして『読む力』について研究してきました。そうすることにより子供たちの読みが深まったり、広がりを実感として感じられたりするようになるからです。教師が意図的に『読む力』を育てるように仕組んだり、友達との読みの交流を通して学んだりすることにより、読みという行為そのもののおもしろさを実感できれば、『読む力』はより意識され、自己の読みが確立したと感じられるような瞬間を子供たちが出会えることができると考えました。



(国語科主任 野谷 知秀)

1 研究の経緯

研究主題「学びに目覚める子供たち」を受けて、国語教育を取り巻く現状から考え、国語科では真の学びを以下のようにとらえた。

ことばに関心を持ち、生活の中で意識して使ったり進んで読書生活を広げたりすることを通して、言語生活を豊かにしていこうとすること

そこで研究主題を「国語の力を意識して自らの学びに生かす子供の育成」とし、その実現に向けて、主に「読むこと」の領域で、『読む力』に焦点を当てて3年間の研究に取り組むことにした。

研究1年次、2年次には次のような内容で進めてきた。

＜1年次＞ 研究副主題：～ことばを通して、一人一人の『読む力』を高める授業の構想～

(1) 一人一人が『読む力』を身に付けるための支援の工夫

→ことばに着目すること、活動を繰り返すことで定着を図ること、一人読みを深めていくこと

(2) 読書生活を豊かに広げるための学習展開と支援の工夫

→読書環境を整えること、楽しさを実感する音読や創作活動、読書生活を広げる読みの交流

＜2年次＞ 研究副主題：～ことばを通して、一人一人の『読む力』を高める授業の展開～

(1) 一人一人が自らの『読む力』を高めるための学習展開と支援の工夫

→読みの観点を生かした読み深める活動、読みの交流や繰り返して読みの変容を生み出すこと

(2) 身に付けた国語の力を生かして自分の学びを深めるための教師の支援

→国語の力の意識化、身に付けた力を活用できる場の設定

これまで2年間の研究を通して、一人一人の「読む力」を高めていくために、①読みの観点を生かして、繰り返し教材を読んでいくこと ②友達と様々な方法で読みの交流を行っていくこと の有効であることが分かった。

さらに、身に付けた『読む力』をより確かなものとしていくために、自分からその力を発揮していける展開の工夫やそれに向けての教師の手立てを考えたり、学習内容や自分の変容を実感するために、互いに高め合うことができるような学習活動や支援を工夫したりすることが重要であると考えた。

2 研究の方向

今年度は研究の3年次の副主題「学びの自立を目指す」を受け、国語科における『学びに目覚めた子供の姿』をこれまでの研究から明らかにし、その姿が見られる授業を目指してきた。これまで2年間で、授業中で見られた学びに目覚めた子供の具体的な姿は次のようになる。

- 読み解く手がかりとなることばに着目して、線を引いたり丸で囲んだりしながら熱心に読み進めている姿
- 二つの資料を比べて大切な部分を書き出しながら、これまで気付かなかった新たな読みを見つけている姿
- 教材文に書かれた事実を抜き出したり根拠をしっかりと挙げたりしながら自分の考えを自信を持って伝えている姿
- 読み取った自分の考えがまとまると進んでいろいろな友達のところに行き、新たな見方や考え方を知ろうと自分から話しかけている姿
- 友達と読みを交流することで、友達とは違う自分の読みのよさに気付き自信を深めている姿
- 友達と自分の読みを比べながら、納得したり疑問を投げ掛けたりしながら十分に話し合っている姿

そこで以上のような具体的な姿から、国語科では学びに目覚めた子供の姿を以下のようにとらえ直した。

ことばを大切にして友達と活発に交流することで、自らの学びを広げたり深めたりしながら、自分の国語の力を生かして学習に取り組んでいる子供

学びに目覚めた子供の姿が日々の授業の中で見られるようにするために、一人一人が自分の国語の力を最大限に生かして自ら教材に取り組んでいくこと、また友達との交流を通して、学習内容や自分の変容を実感したり、国語の力を実感したりできるような授業を追究していくこととした。

そのために今年度は、様々な言語活動を取り入れ、一人一人の『読む力』を存分に発揮することができるようにしていきたいと考え、研究副主題を、「ことばを大切にして、自らの『読む力』を発揮し互いに高め合う授業の追究」と設定して研究を進めることとした。

3 研究の内容

(1) 一人一人の『読む力』を発揮していく展開の工夫と教師の支援

学びに目覚めた子供の姿をさらに明らかにしていくために、一人一人が進んで『読む力』を発揮していくことが重要だと考える。これまでの研究の成果である「初めて知った」「本当かな」「美しいところ」「不思議だ」などの読みの観点に従って教材を読むことによって、読みが焦点化され、拡散することなく読み深めていくことができるというよさがある。これを生かして、繰り返し一人読みを行うことで自分の読みについて振り返ったり、読み取ったことや感想の交流などのために繰り返し教材を読んだりすることを大切にしていく。これらの方法を活用して、一人一人の『読む力』を高めたり、これまでや本単元で身に付いた『読む力』の高まりを実感できるようにしたりしていくことが、更なる学習への原動力となり『読む力』を発揮して自ら学習に取り組めるようになるであろう。そこで、身に付けた『読む力』を自ら発揮できる学習活動や教師の支援を考えていくこととした。

ア 進んで読むための単元展開の工夫や支援

子供たち一人一人が自らの力で、進んで「読むこと」に取り組んでいくことができるようにするには、まず出会った教材に対する自分の思いや考えをしっかりと持てるようにすることが大切である。そのために、我々教師がこれまで以上に教材解釈を大切に、子供が自分の思いや考え、課題意識を持って読み深めたり広げたりすることができるように、単元展開、発問や支援の工夫を行っていくこととした。その中で、自分がこれまでに身に付けた『読む力』を意識して使っていくことができるようにすることで『読む力』を発揮できるようにしていく。

- ・ 主教材を読み解くための「解釈文」などを開発し、進んで取り組んでみたくなる教材の工夫する

- ・ 読み解く手がかりとなることばや学習のヒントを学習の手引きとして提示することで、自ら追究していく楽しさを感じる活動の工夫をする
- ・ 比べて読む資料を与え、比較して考えたりどちらかの立場をとって討論したりすることで、多面的により深く考えられるようにする

3年 「わたしだけの『クイールはもうどう犬になった』をつくろう」での実践

自らの力で教材を読み取っていくために、主教材『クイールは盲導犬になった』では紹介されていない部分や読んでいて疑問に思ったところを教科書教材や他の図書資料から補い、自分だけの本を創るというめあてを持って学習に取り組んでいくよう単元の展開を変更した。また、関連する図書資料に関しては、子供たちの疑問や興味を持った部分に合わせて意図的に提示するように教師が教材文を作成したり、どんなことばを注意して読むのかを伝えて読み進めるようにしたりすることで、意欲的に取り組んでいけるように支援した。子供たちは、「自分だけの『クイールは盲導犬になった』を創るために読みたい」「もっと盲導犬について知りたい」という気持ちを持って関連資料にじっくりとあたったり、自分の作品のページが増えていくことに喜びを感じたりしながら進んで「読むこと」に取り組んでいった。



イ 自分の『読む力』を実感していくための教師の支援

これまでの研究から、単元ごとに身に付けた国語の力を学習計画表にグラフや文章で累積していくことで、できるようになった自分を意識したり、今の自分に不足している国語の力を身に付けられるように意識したりしてきた。その結果、子供たちは自分の成長を感じることができるようになってきている。そこで、さらに自分が身に付けた『読む力』をはっきりと自覚して学習に取り組んでいくことや学習で身に付けた国語の力を意識していくことができるように、一時間一時間ごとの学びの成就感や満足感を得られるようにしていくことを大切にしていくこととした。そこで今年度は、毎時間、授業の導入時に「今日のゴール」として子供たちの思いと教師の願いとを生かして身に付けてほしい国語の力を子供たちのことばに置き換えたものを提示する。そのことにより、意識して学習に取り組み、終末に振り返り成就感や満足感を積み重ねていくことで得られる学びの実感を大切にしていく。そのことにより、本時で身に付けた『読む力』は何であるのか子供たちにも明確に意識され、すべての子供に身に付けさせたい『読む力』を具体的にとらえられるようにしていく。

- ・ 本時で身に付けてほしい『読む力』を教師と子供で共有しながら学習に取り組む
- ・ 変容の実感や学習の達成感が得られる今日のゴールを生かした展開の工夫を行う
- ・ ねらいに応じた多様な展開を工夫し、『読む力』の基礎・基本の高まりを実感できるようにする

5年 「『注文の多い料理店』解説ノートを作ろう」での実践

第1場面から第5場面まで読み取った後で、子供の読みの課題を生かして今日のゴールを「紙くずのようになった顔だけはなぜ元のとおりになおらなかったのか友達の考えから納得いくものを見つけられればすばらしい」と提示し、教師と共有していく。変容の自覚が得られるように、友達の読みを納得するかどうかという観点で比べ、さらに賢治の意図が表れた作品解釈と読者論的な作品解釈を紹介し、自分の読みに自信を持ったり、さらに新たな読みに気付いたりする活動を取り入れた。その結果、本時のねらいである作品のテーマを読むといったことが自然と達成され、本時で成就感を得たことが「読書日記」の記述から見取ることができた。

注文の多い料理店を読む A
宮沢賢治は、『注文の多い料理店』について次のように語っています。
「二人のしんしがりやうに出て道を迷ひ、『注文の多い料理店』に入り、そのとほうもな い経営者からかえつて注文されてた話、食料にとほしい村の子供らが、都会文明と 勝手気ままに乱れてゐる人たちに對するやむにやまれない反感です。」
作品に出てくる二人のしんしは、身なりこそイギリスの兵隊のやうに上品ですが、都会の人間を代表した、心のいやしい人物としてえがかれてゐます。死んでしまつた犬を前に、お金でその価値を計るところから分るでしよう。
二人が最後になつておそれおのき、顔をくしゃくしゃにしてしまふのは、「自然を重要でない」と考える都会人が、思ひ上がつてゐる様子の表れなのです。
それが、いつたん死んでしまつた、しんしが見すてたはずの犬によつて教わるというのは、大きな皮肉です。また、この犬の姿は、ひどいあつかひを受けようとも救ひの手をさしのべる、自然を表してゐるとも考えられます。

(2) 互いに高め合う学習活動の工夫と教師の支援

友達と互いの読み取ったことや考えを交流し合うことは、自分の見方や考え方を広げたり、自分の『読む力』を確認することができたりするよさがある。これまでの2年間の研究においても、読みの交流を行うことの有効性は十分に感じられる。そこで今年度は、『読む力』を高めるために用いた交流を、一人一人の『読む力』を発揮する場所としても見直し、今までの互いに高め合うための読みの交流とできた喜びを実感するための読みの交流の二つの点から大切にしていこうとする。

ア 互いに高め合うことができる読みの交流の場の設定と教師の支援

教材文の持つ特徴や学習者の興味関心などをもとに、ことばや文章そのもののぶつかり合いの中でこそ新しい読みの発見が生まれる。そのような場を教師が意図的に仕組んだりしていく。

友達と交流していくことで互いの読み取ったことや考えを深めていくには、進んで互いの見方や考え方について語り合う姿が見られるようにしていくことが大切である。そのために読みの交流を行う時間をただ確保するだけでなく、話し合わなければならない状況を意図的に作ったり話し合ってみたくなる課題を設定したりするなど、交流が活発に行われるような手立てを工夫していくこととした。

- ・ 話し合う集団の人数を変えたり、同じ意見同士や違う意見同士でグルーピングしたりして、交流の必然性を高める。
- ・ 対立する読みによる話し合いの形式など、読みの交流が活性化するような話し合いの進め方の工夫や、討論する内容として取り上げるテーマの吟味を行う
- ・ 交流を通して、新たな見方や考え方に出会い、自分の読みが深まっていくことに喜びを感じられるテーマで話し合いを行えるようにする。

5年「注文の多い料理店」 解説ノートを作ろう」での実践

「注文の多い料理店」を読んで、紳士派と山猫派に分かれて話し合う。紳士の身勝手さ、山猫軒内での親分と子分との関係などを比べる。どちらが勝ったと思うのか文章を根拠に理由付けをした上で話し合った。そのことにより読みの交流が活性化し、友達の読みから新たな納得を得ることができた。交流を通して読み深まったことは、読書日記からも見る事ができた。

イ できた喜びを互いに実感できるような読みの交流の工夫

自分の『読む力』を実感していくために、読みの交流の中でできた喜びを感じたり、できるようになった自分に気付くことを大切にしたい。そこで「発表したい、見せたい」と感じた学びの喜びを表現していく活動を積極的に取り入れることとした。このような自分の『読む力』を友達に向けて自己表出する活動を通して、できた喜びをより実感していくことができるような交流を工夫していく。こうした活動をする事により、子供たちは表現活動と教材文との往復をすることになり、そのことが自分の国語の力として積み上がっていく。

- ・ 学習したことを言語操作（書く、話すなど）を行いできた喜びとして実感し、それを友達と交流することで、互いの成長を知ることができるようにする。
- ・ 作品を創り上げていく過程において、互いの作品を読み合う活動を重視して、交流の中で自分の『読む力』の高まりを感じられるように達成感や成就感を大切にする。

4 研究の成果と課題

単元レベルや教材レベルでどんな『読む力』を付けたいか明らかにした上で、ねらいに応じた言語活動と組み合わせ、教材の開発や言葉により着目した教師の支援、読みの交流を生かして対話的な読みをすることにより、子供たちが『読む力』を発揮していけるようになった。今後は、子供たちの表現活動とテキストとの効果的なかわり方について研究し、生活の中での読みの広がりや深まりを自覚できるようにしていきたい。